

私が見た英米の医療現場 (1・英国編)

大村市医師会 会員 廣田 正毅 (元、在アメリカ日本国大使館参事官兼医務官)

52歳になって間もない頃である。長崎大学医学部の助教授を経て、当時琉球大学医学部の教授職にあった私は、外務医務官へ応募した。この制度は、外務省が諸外国にある日本大使館や総領事館に、外交官の立場で医師を配属し、2〜3年の周期で各国に勤務させるといシステムである。とくに感染症を一つの専門分野としていた私には外務省からの強い要請もあり、自分の興味もあいまつて、入省を決意したのであった。

ところで、イギリスの日本大使館に着任して間もない頃である。

強い腹痛を訴えてきたK氏を救急車で病院へ搬入した。救急車が病院(NHS)へ着いたのは夜中の11時頃であった。受付を簡単に済ませると、看護婦が簡単な問診と診察をして、そのまま消えた。周囲を見渡すと、白いカーテンだけで区切られた質素な診察室が並んでおり、数人の患者さんが隙間越しに見えた。それからである。K氏も私も待ちに待った。幸いK氏の腹痛は治まる傾向にあったが、医師の診察が始まったのはなんと5時過ぎで、2・3回分の

痛み止めをもらって病院の玄関を出た時には夜がすでに明けかけていた。救急車で運びこまれたというのに6時間も待たされたのである。イギリスの救急病院では、病気が軽ければ診察は後回しになると聞いていたものの、こんなにひどいとは思わなかった。後日、私は大使館の館員に声を大にして、「救急車で病院に担ぎ込まれたら、症状をオーバーに表現して、ジェスチャーでもいいから苦しみがいて下さい。そうしないと、すぐには診てもらえませんか」と、私は大真面目に訴えたのであった。

外交官の娘S嬢は、下腹部痛を訴え、近所のNHS病院へ入院していたが、付き添っていた母親から私に電話があった。「娘の腹痛がなかなか治りません。先生診て下さい」。急いでその病院へ行ってお腹を診察したが、直ちに「これは大変だ」と直感した。効きが悪くて安価な抗生物質の投与を続けていた主治医をやつと説得し、私の知っている個人病院へ急いで転院させた。病院へ到着するなり、虫垂炎の診断で直ちに緊急手術となった。知り合いの医師が術

後にこうばやいた。「NHS病院では、医療費を抑えるためにできるだけ手術をしない方針なのです。」後日聞いた母親の話では、最初に入院したNHS病院では医療費はすべて無料であったが、手術を受けた個人病院では日本円にして約320万円を支払ったそうである。

さて、ここでNHSについて説明しておかなければならない。NHSとは、National Health Serviceの略であり、いわば厚生省である。それ故、NHS病院とは、国営病院のことである。救急車で患者さんが運び込まれる救急病院は、どの病院もNHS病院であり、救急車の料金や病院での医療費は、全額無料である。それとは対照的に、個人病院の医療費は極めて高額であることは、この例でもお分かりいただけたであろう。

しかしイギリス国民のNHS病院に対する評判は至ってかんばしくない。「なかなか手術をしてくれない。高価な良い薬は使わない。救急病院では何時間も待たされる。優秀な医師がいない。」などの悪評が噴出し、一方、医師からは、「給料が安い。待遇が悪い。」などの

不満が続出し、多くの優秀な医師がイギリスから国外へ流出している。そのため、金持ちの患者さんは、自然と個人病院へ流れている。S嬢が入院した個人病院は、実にすばらしい環境にあり、病室の窓から眺める景色は、まるでゴルフ場の中に見えるような錯覚に陥るほど、芝生が目前に広がったすがすがしいものであった。病状によりけりだろうが、病院食にはメニューが付き、好きなものを選べるようになっており、ワイン・リフトも添えられていた。

以上の経験例で述べてきたように、イギリスでは、医療費無料の国営病院が良質の医療を提供できずにもがいているうちに、目の玉が飛び出るような医療費を要求する個人病院が林立し始めた。「揺り籠から墓場まで」の夢が崩れ、サッチャー政権の医療政策は失敗し、ついに対極的な医療現場の出現を、私はこのイギリスに見たのである。



「国民皆保険制度を守る署名運動」に御協力いただきありがとうございました。
大村市で1万6,229名(全国で1,700万人超)のご署名をいただきました。
引き続き国民皆保険制度を守る運動へご協力よろしく申し上げます。



編集後記

大村市医師会理事 牟田 幹久

列車脱線事故、マンシヨン偽装建設、子供の殺人、虐待等、殺伐としたニュースが多く飛び交った平成17年。その根底には物が溢れる豊かな時代に心の貧困があるような気がしてなりません。その様な中、映画「Always 三丁目の夕日」を観ました。私が生まれた頃の日本です。頑固親父と肝つ玉母ちゃん、遊ぶ事が大好きだった悪がきたち。敗戦というどん底から復興しつつあり、物は無くても未来を夢見て心豊かに生きていた日本人、輝いていました。再び世界に誇れる国になる事を目指し頑張っている親父たちの大きな背中、いつも優しく包んでくれるお袋たちの温かい胸は、子供たちに

はお金で手にする事の出来るどんな物よりもずっとすばらしいものでした。日本をここまで築き挙げたのは、今は高齢者と呼ばれるあなた方が頑張ってくださったおかげです。いつまでも元気でいて下さい。そして、今を支える私たち、子供たちに大きな背中をみせてますか？温かい胸で包んでいますか？子供たちの明るい未来を守るため、今何をすべきか、何が出来るか、みんなで一緒にもう一度考えてみましょう。平成18年がすばらしい年になる事を願っています。

